

時代が終り、
時代が始まる

中上健次

時代が終り、
時代が始まる

中上健次





中上健次（なかがみ・けんじ）
 一九四六年、和歌山県生まれ。和歌山県立新宮高校卒業。七六年、『峠』にて第七四回芥川賞受賞。『枯木灘』にて七七年毎日出版文化賞、七八年芸術選奨新人賞をそれぞれ受賞。その他の著書に『風仙花』『水の女』『千年の愉楽』『地の果て 至上の時』ほか多数。

時代が終り、時代が始まる

一九八八年九月一〇日 第一刷印刷
 一九八八年九月一六日 第一刷発行

定価二〇〇〇円

著者 中上 健次

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二丁目二八
 〒103 電話(03)二三〇一三三
 振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

(落・乱丁本はお取替え致します)

時代が終り、時代が始まる
目次

I

時代が終り、時代が始まる

燃える、燃える

飢えた子がいなくて文学は可能か？

言葉を吐く代わりに息を吸う

血と知の粗^あれ——形式主義^{フォルマニズム}の時代

韓国のマスコミさん、あなた方も言論の自由を求めてるんでしょ？

II

もうひとつの国

光と翳 43 バサラの美 65

ヴァイブレイションのクマノ 97

南の記憶 I 115 南の記憶 II 136

43

37

32

24

20

17

13

Ⅲ

変ったアン

「独立問題」、消える

スゴイデスネーッ 浅田クン

都はるみ 最後のヒノキ舞台

戻らない

ダバオの日系人

ココナツ・ボーイ

ダメ男、ここに極まる

ニューヨークでのカニ

ホワイト・オン・ザ・スノー

フィンランドの火祭り——ラハティ国際作家会議に出席して

乞食女のブーケ

IV

吉本隆明論

性としての国家——吉本隆明著『共同幻想論』文庫版解説

“時代の気質”を刻む——『古井由吉作品』完結によせて

読者への手紙——梅原猛著『怨霊と縄文』文庫版解説

「天」の位置——森敦著『意味の変容』ノオト

時代とむきあう感性運動——佐々木幹郎詩集解説

野田秀樹の東京とカフカのニューヨーク

——野田秀樹著『怪盗乱魔』文庫版解説

V

写真の物語力——篠山紀信論

輪舞する、ソウル——〈意味〉の帝国からの脱走^{ソウル}

写真時代の柳田国男

東京とアーバン・プリミティヴィズム——ムバタ論

VI

活力の所在——川村二郎著『語り物の宇宙』書評

神いじりの愉しみ——川村二郎著『日本廻国記 一宮巡歴』書評

反物語^{ボック}を今読む——石川淳著『狂風記』書評

死の過激——石原慎太郎著『暗殺の壁面』書評

存在と非在——田久保英夫著『海図』書評

金芝河の「大説『南』」を読む

韓国と日本の現在——李良枝著『刻』書評

著者の依拠する両班^{ヤンバン}的立場が問題——崔吉城著『韓国のシャーマン』書評

都市小説の源をつく暗喩としての疎外や差別

——トニ・モリスン著『青い眼がほしい』書評

高いIQで仕組んだワナ——島田雅彦著『優しいサヨクのための娯遊曲』書評

VII

トボスの文学

近代の憶良

山本先生と花

新吉野伝授

花あれば——山本健吉追悼

VIII

坂口安吾・南からの光

一葉の場所

音の人 折口信夫

〈場所〉と植物

フォークナー、繁茂する南

フォークナー衝撃

病いの果てに——ボルヘス論

後記

初出誌紙一覧

時代が終り、
時代が始まる

時代が終り、時代が始まる

一昨年、ちょうどパリの友人が、私と浅田彰氏のために夕食会を開いてくれた時だった。浅田氏はヴェネチアかどこかの会議に出る途中パリに立ち寄り、私の方はニューヨーク暮らしだったから、翻訳家に会うために気楽にパリに飛び、友人のアパートに寄宿していたのだが、たまたまパリに居合わせた日本人二人の顔合わせを友人が面白がっての事だろうが、その夕食会の席で出席の客の一人から、ボルヘスが死んだのを車のラジオが報じていたと聴かされたのだった。良きにつけ悪しきにつけニュースというものの衝撃が大きければ大きいほど、その耳にした時を鮮明に記憶するものである。

その夕食会は楽しかった。それからすぐニューヨークに戻り、さらに再び東京に舞い戻って、幾度か外へ短い旅をしたが、東京暮らしをつづけていると、茫々と過ぎ忘れてしまう過去の時間に空いた破け穴のようにその時があり、本来なめらかな手触りのびろろの布のような過去に刺さったピンのように、折りに触れ痛みがわき上がる。

昨年は、その「折り」が多過ぎた。胸が痛み過ぎる。何人の尊敬する方々が亡くなったか。何人の敬愛する友人がここから居なくなつたかという嘆きを禁じ得ない。

死というものは不思議だ。人の気持ちを浄化する。一昨年から昨年にかけて鬼籍に入られた方々、

円地文子、島尾敏雄、深沢七郎、面識はないが尊敬していた方々、中里恒子、澁澤龍彦、森茉莉、さらにジャン・ジュネ、ジェイムズ・ボールドウィン、それらの方々と共有する時間に空いた破け穴、手に刺さったピンの痛みは、その破け穴が大きい分だけ、ピンの痛みが強い分だけ、まだこの穢土に引き留められ続けている者の穢れを祓う。

いやこの社会が人の行動の産物なら、社会をも浄める。おそらく私たちは、今はしかと気づかぬが、比類なく美しい時代を生きているのだらう。死という人の個体に不可避な物、死という具体的で抽象的な物、戦時ではなく平常時にこれだけ数多くの死を目撃し、認知する事はかつてなかったのである。

目撃し、認知した私たちは何を為しているのだろうか。あるいは何を為すべきか？ 私に啓示のように思考や行為の示唆を与えてくれたのは、沖縄・読谷村で起こった「日の丸」焼棄事件だった。「日の丸」焼棄事件というすぐれて政治的社会的事件と文学者の死や私の友人らの死を結ぶのは、「日の丸」焼棄事件を、私はこの穢土にまだまだ引き留められ続ける者の行為、ひいては言葉の問題と考えるからである。

その事件の三カ月前、私は読谷村に滞在し、「日の丸」焼棄事件を起こした当事者に、一九四五年四月、敗戦の数カ月前に起こった村民の大量死の説明を受け、その現場となったチビチリガマを案内されたのだった。

その大量死は、米軍の沖縄上陸の時に起こった。海に面した小さな村は、目の前に出現した米軍の艦隊に驚き、恐慌をきたし、海からさして離れていない自然壕の中に大挙して逃げ込み、一人の若い女性が生きて鬼畜の餌になるよりと自害したのがひきがねになり、次々と八十幾名が自決し始めたのだった。